

前へ

スネ夫は目の前に置いた卵を凝視していた。
卵は時折揺れては止まることを繰り返す。
何度も期待を裏切られながら、スネ夫はまだ諦めなかった。

ポケモンの卵 育成所にあったのだから、ポケモンの卵と見て間違いは無い。
そう思い当たると、スネ夫は自然と好奇心が湧いた。
ポケモンの生まれる瞬間に立ち会えるという興奮。
ゲーム画面を介して見てきたことが、現実として起きる。
一度でいいから見ておきたい。
その想いに駆られてスネ夫はその瞬間を待つと決めたのだ。

「……あっ！」
思わず声を上げるスネ夫。
卵が一際大きく揺れだしたのだ。
スネ夫は手を伸ばして、卵を掴もうとする。
あと少しで卵に触れる……ほんの数センチでスネ夫の手が卵に触れる。

だが、突然卵の揺れは止まった。
直後に大きな音が育成所内に響き渡る。
爆発のような衝撃音、そして地響きを伴う振動。
「な!? なんだこの揺れはー！」
スネ夫は叫びながら咄嗟に、卵に抱きついた。

ジャイアンと静香は振動に気づいた。
「お、おい何だこりゃあ!?」
狼狽するジャイアンの横で静香も当惑していた。
「わからない。でも、きっと近くで大きな力があったのよ！」
その時、育成所の扉が勢いよく開く。
見ると石路会員の一人が立っていた。
「おい、お前ら早く屋上へ来い！」
会長が客人に襲われたんだ。とっとと相手を殺りに行くぞ！」
会員はそう叫ぶと駆け出していく。
残されたジャイアンたちは暫く呆然としていた。

まず動き出したのはジャイアン。
「何かよくわかんねーが、会長って白髪の爺さんのことだよな？」
問いかけられた静香はたじろき、そして頷いた。
「あの爺さんは、絶対悪い人じゃない。俺はそう感じた。
見ず知らずの俺たちをわざわざ運んできたんだ」
「……牢屋だけだね」
少し離れたところから声が聞こえたので見ると、スネ夫が卵を抱えて膝をついていた。
「それに僕らは侵入者として捕まったんだ。
あの様子じゃなかなか逃げられそうにないけど、この混乱に乗じればどうだい？
今なら簡単に逃げられ」
「ふざけんな、この野郎！」
ジャイアンは足元の卵を掴んでスネ夫に投げつけた。
かなりのスピードで飛んだ卵はスネ夫の顔面に激突する。

「ん、何すんだよジャイアン!!」

卵を払いのけ、鼻を覆いながらスネ夫は怒鳴った。

「逃げるなんてできるかよ！俺たちは世話になってんだぞ」

「ふん、だからそれは捕まっただけだって言うてんだろ！」

スネ夫は先ほど投げつけられた卵をジャイアンに投げ返した。

放物線を描いて、卵はジャイアンの手に収まる。

「それでも、俺たちにタイムマシンの事故を教えてくれた。

状況がわかってない俺たちにいろいろ説明してくれただろ！」

再び、ジャイアンは卵を投げ返す。

卵は真っ直ぐスネ夫に向かって飛んでいく。

「くだらねえ」

スネ夫は飛んできた卵を叩き落とし、そのまま立ち上がる。

「僕は逃げるよ、そんなことをするほど感謝した覚えは無い」

そう告げると、スネ夫は歩いて扉へ向かう。

「……待てよ、スネ夫」

ジャイアンは口調を抑えて話し出す。

「もし、あの爺さんが俺たちを連れてこなかったら、俺たちはどうなっていた？」

その問いかけに、スネ夫の体が止まる。

「わけわからねえまま、野生のポケモンに襲われてとっくに死んでた。そうだろ？」

お前だってわかるよな。

だいたい、何でこんなことで争ってんだよ」

ジャイアンはスネ夫に近づく。スネ夫はゆっくりと振り返り、ジャイアンを見据えた。

「こんな状況だ、俺たちは一緒に巻き込まれた仲間だろ。

少なくとも、のび太を見つけるまでは絶対死ぬわけにはいかないよな」

ジャイアンの言葉は、スネ夫の耳にしっかり届いた。

スネ夫は短く溜め息をつく。

「しょうがない……行こうか！」

「武さん、スネ夫さん！」

静香が声を掛けて走ってきた。

後ろに数体のポケモンを連れてきている。

「客に来た人はポケモンを使って襲ったに違いないわ。

でなきゃあんな振動が起こるはずないもの。

さあ、相手がポケモンを使っているんだから、こっちもポケモンで応戦よ！」

そう意気込むと、静香は後ろに連れられたポケモンを振り向く。

その中からストライクを引っ張り出すとジャイアンに押し出した。

「武さんにはこの子がぴったりだと思うわ」

ジャイアンはそのストライクをしげしげと眺めた。

「なあ、しずちゃん、これってさっき俺をぶった斬ろうとした奴じゃ」

「ええ、ちょっと血の気が多いの。

でも大丈夫、バカみたいに速く走るしバカみたいに力が強いだよ、この子。

ホント、バカが使っても攻撃してりゃ十分戦えるのよ！あなたにぴったりでしょ？」

何か嗅いているジャイアンを無視して、静香はスネ夫にもポケモンを押しやる。

「ほら、スネ夫さんにぴったりなのはこの子よ」

黒い羽で空中に浮かぶそのポケモンは、ズバットだった。

「うわ……ズバットかあ。懐かしいな。

でもどうして僕にぴったりなの？」

「ええ、この子は『さいみんじゅつ』を覚えてるし『どくどく』の技マシンも使ったの。

『ちょうおんぱ』も使えたはずよ。混乱させ、眠らせ、毒浴びせるのがあなたの戦法だったじゃない！」

スネ夫は遠い記憶を思い出した。

攻撃しか出来ないのび太やジャイアンをノーダメージで潰す自分。

手も足も出ない相手を嘲る自分の高らかな笑い声。

「そうか、そういえばそうだった。

ふふ、ありがとう。しずちゃん、僕らしさを思い出したよ」

微笑みあう二人に対して、ジャイアンはさらに恐れを感じるのであった。

ジャイアン、スネ夫、静香はそれぞれのポケモンを従え、一際騒がしい部屋へ突入した。

応接室 扉にはそう書かれていた。

粉塵が巻き起こり、三人は足を止める。

怒声や喚き、唸りが一度に鼓膜を貫く。

「お、おい！あれは」

スネ夫は上空を指す。

どうやら破壊されたい天井から、鋼の羽と青年の姿が望めた。

堂々とした顔立ちの青年が、青の髪を靡かせエアームドの上に佇む。

その目からは明らかな侮蔑が感じられた。

「バブルこうせん！」

室内にいた会員の一人が自分のポケモンに指示した。

無数の泡が噴出されて鋼煌めくエアームドに接近する。

だが、青年は動じなかった。

泡はエアームドの装甲に突撃し、虚しく破裂を繰り返す。

「き、効いてない！？」会員の絶望的な叫びが響く。

「いや、攻撃は届いているよ。ちゃんと……でもね」

青年は含み笑いで顔を歪める。本性が垣間見えた瞬間だった。

「弱すぎるんだよ。全員。

……相変わらず温いな」

青年が見下す先には、会長の白髪がある。

会長は床で横になっていた。

相当負傷した様子で、青年を見上げるのも辛そうだった。

もっとも、外面的な事情のみでは無いのかもしれない。

「ストライク、あの鳥切り裂け！」

ジャイアンは感情の赴くまま叫ぶ。

目の前で倒れる恩人の姿が、ジャイアンの心の衝動となったのだ。

微かな振動音、そして緑の疾駆が銀色めく怪鳥へ迫る。

ジャイアンの目は、鎌がエアームドに届く瞬間を捕らえ

「え……？」

これもまた『瞬間』。

「ジャイアン！」「武さん！」

二人の叫びが聞こえる。

ジャイアンは恐る恐るめを開けた。

鋼の刃が自分の喉元の寸前で静止している。

まるで時間が止まったようで、僅かに塵が舞っているだけ。

沈黙が痛い。

「う、うわ！」

ジャイアンは慌てて腰を抜き、尻餅をつく。

その時何かが右手に触れ、怯えからの瞬発力で振り向いた。

「ス、ストライク……ク」

さっきまでジャイアンの背後にいたそれは、四肢と羽を無造作に広げて倒れていた。

僅かに息をしているものの、動く気配はない。

もはや虫の息なのだろう。

「……ふん、ガキか」

エアームドの上では青髪の青年がジャイアンを見据えていた。

「おい、爺さん！ここはいつから育児所になったんだ？」

青年の言葉が室内に響き渡る。

会長は少し呻いただけだった。

「会長！」

なす術が無く右往左往していた会員達が、急いで会長に駆け寄る。

それを見て、青年はなお嘲笑した。

じゃあな、爺さん、もう用は無い」

エアームドは羽ばたき、青年を連れて浮上する。

スネ夫は飛び立つ背中に向けてズバットを向かわせようとしたが、脇から手が出る。

静香がスネ夫を制したのだ。

「な、何だよ、しずちゃん！

早く追わなきゃ」

「ダメよ、何となくだけどわかるでしょ？」

遠ざかる青年を静香は青い顔をして見つめた。

「小賢しい手を使っても無駄よ。

あの人にはとても……勝てないわ」

スネ夫は反駁を加えようとしたが、言葉が無かった。

静香の言葉が事実だからだ。

ジャイアンは飛び去っていくエアームドの姿をぼんやり見つめていた。

足元のストライクはぴくりとも動かない。

(死んだんだ……俺のせいで)

ジャイアンは愕然とし、虚ろな目で亡骸を見下ろした。

(俺がここへ来なければ……こいつは死ぬことはなかった)

ジャイアンは戦うためにここへ来た。

その心には好奇心　ポケモンを使役して戦うことができるという考えがあった。

いろいろと言葉で飾ったが、本心はそれだけだ。

恩返しとかそんなのよりもまずはただ楽しそうだから来たのだ。

今、その代償をジャイアンは感じた。

屈みこみ、震える手でストライクの体を包む。

もう冷たくなっていた。

「……ごめんよ、ストライク」

ジャイアンの言葉もまた、震えていた。

罪悪感がジャイアンの体に押し掛かった。

ストライクを包む腕が一層力を増す。

(俺が、ここへ来なければ……こいつは死ななかった)

ほどなくして、スネ夫と静香が寄ってきたが、状況は変わらなかった。
会員たちが集まり、会長と倒れているポケモンたちを運んでいく。
ジャイアンたちもその後を追った。

「すまないことをした……」
会長が苦しそうな声を搾り出す。
ここは医務室　部屋の中には三人の人間。
ベッドで寝ている会長、その脇でスネ夫と静香が立っていた。
医務室長は会長の命令で外にいる。
「君たちを巻き込むつもりはなかったんだ。本当に」
「謝る前に、教えてください」
静香が切り込んだ。「いったいさっきの襲撃はなんだったのです？」
「……話さなければなるまい。ところで、大柄な少年はどこへ？」
こちらにはスネ夫が答えた。
「どうも傷心らしくて……外に出ています」
会長は一瞬不審そうな顔をしたが、すぐに思いつめた表情に戻る。
「仕方あるまい。後で彼にも話しておいてくれ。
さっきの青年の名はダイゴ　私の息子だ」

石路会には、ずっと対立していた組織があった。
だが石路会現会長は相手にある話を持ちかけた　「和平を結ぼう」と。
その証として会長は自分の息子を、相手のグループのボスに養子として出した。
ボスは子供がいなかったため、この証を受け入れた。
ところが、相手は会長が考えているよりずっと狡猾だった。
「奴らはダイゴを完全にコントロールしてしまった。
何故かはわからん。だが、あいつらの持つ何かがダイゴを変えてしまったのだ。
敵組織の名は榊グループ　理由は他にもあるが、我々は奴らを壊滅させなければならない」

既に何かを察したスネ夫と静香にとって、その組織名は聞き逃せるものではなかった。

「さ、サカキって……」
スネ夫はうっかり口に出す。
「そうだ。表で多くの子会社を所有している大グループだ」
運良く、会長は意味をはきちがえてくれた。
その隙にスネ夫は静香と目をあわす。
静香も驚いた目でスネ夫に視線を向けていた。
(そういえばこの名前も石路　ツワブキ。会長の息子はダイゴ)
(ポケモンがいる世界だけど、どうしてそんなところまで……)
二人の思考は一致した。

ポケモンの世界の人間が現実世界に干渉している。
これが何を示しているか、二人はまだわからなかった。

「どうしたかね？ 二人とも」
会長が訝しげな目を向けてくる。
「あ、あの僕ら」
喋ろうとするスネ夫の前に、静香は手を出す。
「ちょっと……武さんのことが気になっていただけです。
話がよければ、もう行ってもいいでしょうか。武さんのところへ」
会長はゆっくりと頷いた。

「いいだろう。だが、一つだけ話を聞いてくれ」

この建物は岩場で囲まれている。
その外側には森、なかなか入り込みづらい地形となっている。
当然外へ出るのも難しいだろう。
その岩場の真ん中で、ジャイアンは森を見据えていた。
(……俺、どうしてここにいたんだろ)
ジャイアンはぼんやり考えていた。
(俺はここにいられないよな。
だって、俺部外者だし、ポケモン死なせちまった……)
森からは野生のポケモンたちの存在を感じる。
木々のゆれ、うなり声、その他にもいろいろな要素があった。
ジャイアンは吸い込まれるように、森へ向かっていく。

「駄目だよ。そっちいっちゃ」
突然声を掛けられ、ジャイアンは振り向いた。
年若な少年だ。背丈はジャイアンの顎ほどしかない。
緑色の髪が木の葉のように靡いていた。
「森にはいっちゃいけないって、いつも会長に怒られるんだ」
少年はジャイアンに歩み寄ってきた。
近くで見るといかに少年の顔が青白いかがわかる。
「おい、お前なんだよ」
ジャイアンは少年を睨みつけ、歯をむき出しにした。
「俺の邪魔すんな！俺は勝手にここから出て行くんだからな」
「そうもいかないよ。僕はそういう人たちを止めるように言われているんだ。
言い忘れてたね。僕の名前はミツルだよ」

「僕もね、昔ここから出ようとしたことがあるんだ。
そしたら会長に捕まって説得されて……それで森番になったんだ」
少年は親しげに話しかけてきた。
ジャイアンは眉を吊り上げ、背中を向ける。
「森番だか何だかしらねえが、俺は勝手に出て行くぞ！」
そう言うとジャイアンは駆け出した。
(あいつそんなに体力ある風じゃなかった。撒くのは簡単だろ)
勝利に近いものを感じ、ジャイアンは笑い出す。
「楽しそうだね」
すぐ傍で声が聞こえ、ジャイアンはハッと振り向く。
ミツルの顔が目に入った。
「お、お前どうやって　！」
ジャイアンはミツルが跨るものに気づいた。
燃え盛る炎を纏い、ジャイアンを悠々と追い越していく。
「よしよし、早いぞポニータ！」
ミツルの褒め声でそのポケモンの正体がわかった。
「き、きたねーぞ！ポケモン使いやがって」
立ち止まってジャイアンが抗議する。
「？そっちもポケモン使えばいいじゃん」
ポニータが足を止め、ミツルがジャイアンに首を傾げた。
「俺は持ってねえんだよ」
ジャイアンは言葉を吐き捨てた。
「ええ～!?ポケモンも持たずに逃げようとしたの」

予想以上にミツルが反応する。

「それはいくらなんでも無理だよ～！」

ミツルが腹を抱えて笑い出す。

「僕が逃げようとした時は3匹くらい連れて行ったんだけど、それでも捕まったんだよ？

それなのに1匹も持たないでなんて……くく」

身を震わせるミツルだったが、不吉な音をきいてた。

『ガシッ』と。

ミツルは恐る恐る背後を見る。

ジャイアンが炎の尻尾を掴んで立っていた。

「よぉ～くも俺様を笑ったなあぁ!!」

ジャイアンの唸りとともに、ポニータが引きずられていく。

「な、おい何で!? ポニータの尻尾は持ち主以外には熱いのにな」

怖気づいた声を出すミツル。

「へ、俺を誰だと思ってやがる。俺はジャイアン、ガキ大将だぜええ！」

「ほのおのうず」

ミツルの一言で、ポニータの尻尾の火が逆巻き、ジャイアンを包み込んだ。

「ぐうおわぁあぁ!!」

ジャイアンの絶叫が響き渡る。

「あはは、安心しなよ！ ポケモンの攻撃で死ぬことは」

『ガシッ』 ミツルの顔が強張る。

炎から突き出た腕が、ミツルの肩を驚づかみにした。

弾け飛んで消える炎の中から、ジャイアンが飛び出す。

自由な方の腕に拳を作って。

「お～い、ジャイアン！」

遠くから誰かが呼んでいる。

ジャイアンは動きを止めた。

拳がミツルの顔面の数ミリ前でピタッと停止する。

「スネ夫か？」

大きく手を振ってジャイアンは自分の位置を示した。

その脇でミツルが膝をつき、崩れ落ちる。

「ジャイアン、大切な話があるんだ」

スネ夫は駆け寄ってきた。

「結構大変なことになったよ。僕たちはここを去らなきゃならない」

その言葉をきいて、ジャイアンがため息をつく。

「おい、きけよ、ミツル！ 俺は結局ここ出なきゃ　おい、しっかりしろよ」

ジャイアンは地面で息を上げさせるミツルの頭を叩いた。

「……まって、こいつがミツル？」

スネ夫が言う。

ジャイアンはきょとんとして、頷いた。

「ああ、そーいやお前らは知らないよな、俺も会ったばかりで」

「そう、でもすぐ知り合いになれるよ。

僕たち、ミツルと一緒に旅に出なきゃなんだ」

ますます首を傾げるジャイアン。

それはミツルも同じだった。

「とりあえずこっち来てよ、しずちゃんが待ってるから」

ミツルがポニータをボールにしまってから、スネ夫が二人を誘導していった。